その三

鳥鍬・ツルハシ・土方道具

ブルドーザーやユンボが珍しくなくなって、機械掘りがあたり前になった現在でも、ツルハシとスコップは土方の表道具である

スジ掘りでも、マス掘りでも機械でできるが、こまかいところの仕上げなどは、やはり人の手にたよらなければならない。ノリ切りや、土羽打ちも同じことだし、機

械が入らない現場もある。まだまだツルハシとスコップは土方にとって大切な道具なのだ。

ところでツルハシは、鶴のくちばしに形が似ているからその名がついたので、これは元来日本固有のものだろうが、スコップはどう考えても外国から来たものだろう。いつごろから使われるようになったか正確には判らないが、おそらく明治以後のことだろう。

高田玉吉さんの「土工・玉吉」の中にも、鍬一本でノリ切りをする話が書いてあったりして、スコップを使う話はあまり出て来ないから、スコップの渡来と普及は、あまり古い話ではなさそうだ。

すると、昔の土方はどんな道具を使っていたのだろう。

それはやはり土方仕事に一番近い農業の道具を考えるのが手っ取り早い。昔の土方は鍬を使っていたのだろうとは、誰にでもすぐ想像できる。

しかし、よく考えてみると、鍬は握り方には向く道具だが、スコップのようにはハネ上げがきかない点が不便だ。それに畠をたがやす鍬と、土木用の鍬が同じはずがない。土木用の特別の鍬が使われていたのではないだろうか。

そこまで考えてくると、どうしても思いつくのは「黒鍬」だ。昔は土方のことを「黒鍬」とか「黒鍬者」「黒鍬衆」などといった。たとえば「瞼の母」や「一本刀土俵入り」などを書いた小説家、長谷川伸もそのことをしばしば書いている。

長谷川伸は、父親が請負師だったので彼も若い頃土方修業をしていて、明治二十年代の土工社会についてくわしいし、当時のことを書き残してもいる。その長谷川伸が土方のことを「黒鍬」と書いている。

「黒鍬」という名からして、土方と鍬の関係の深さを暗示しているし、もしかしたら「黒鍬」の使った土工用の特別の鍬もそこから判るかもしれない。

そこでまず「広辞苑」をしらべてみた。そこには次のように書いてある。

「くろくわ〈黒鍬〉 ①戦国時代、築城・道普請などの作事に従う人夫、黒鍬者。②江戸時代、江戸城の警備・作事・防火に当った。後には城内の掃除や荷物の運搬などに従い、黒鍬頭・黒鍬同心が置かれた。」

これでは、黒鍬者のことはいくらか判るけれど、使っていた道具の事までは判らない。どうしたらそれが判るだろうと首をひねっていると「広辞苑」の黒鍬と同じ頁に次のような項目があるのを見つけた。

「くろくぐわ〈久六鍬〉→きゅうろくぐわ」

これは手がかりになるかもしれないと、早速「きゅうろくぐわ」の頁をさがした。

「きゅうろくぐわ〈久六鍬〉柄短く角度大きく、柄造は堅牢で、かたい土を掘り起すに用いる鍬。九六鍬。黒鍬」

なるほど、なるほど。これでいろんなことが一度に判った。久六鍬と黒鍬とが同じものなら、黒鍬者の名も、道具の名からきたのだろう。そしてそれは少くとも戦国時代からあったのだろう。だが、これだけのことが判ったために新しい疑問も生まれてきた。

「広辞苑」には久六鍬の絵も出ているが、それだけでは柄の長さや角度、刃の大きさや重さなどは判らない。黒鍬という名が何故つけられたかもわからない。そこで、それからは目につくかぎり、いろんな本を調べた。しかし、江戸時代の鍬のことを、くわしく書いた本がそんなにいくらもあるわけがない。

久六鍬というのだから、久六という人が工夫したのかもしれないと思ったが、それを証明するようなものにはぶつからない。或る本には、長さ九寸、巾六寸の鍬だから九六鍬というのだと書いてあって、真実らしく思えたけれど、実物にお目にかからないうちは信用できないと思った。かりに寸法がその通りでも、それが他の鍬とどう違うのか判らない。

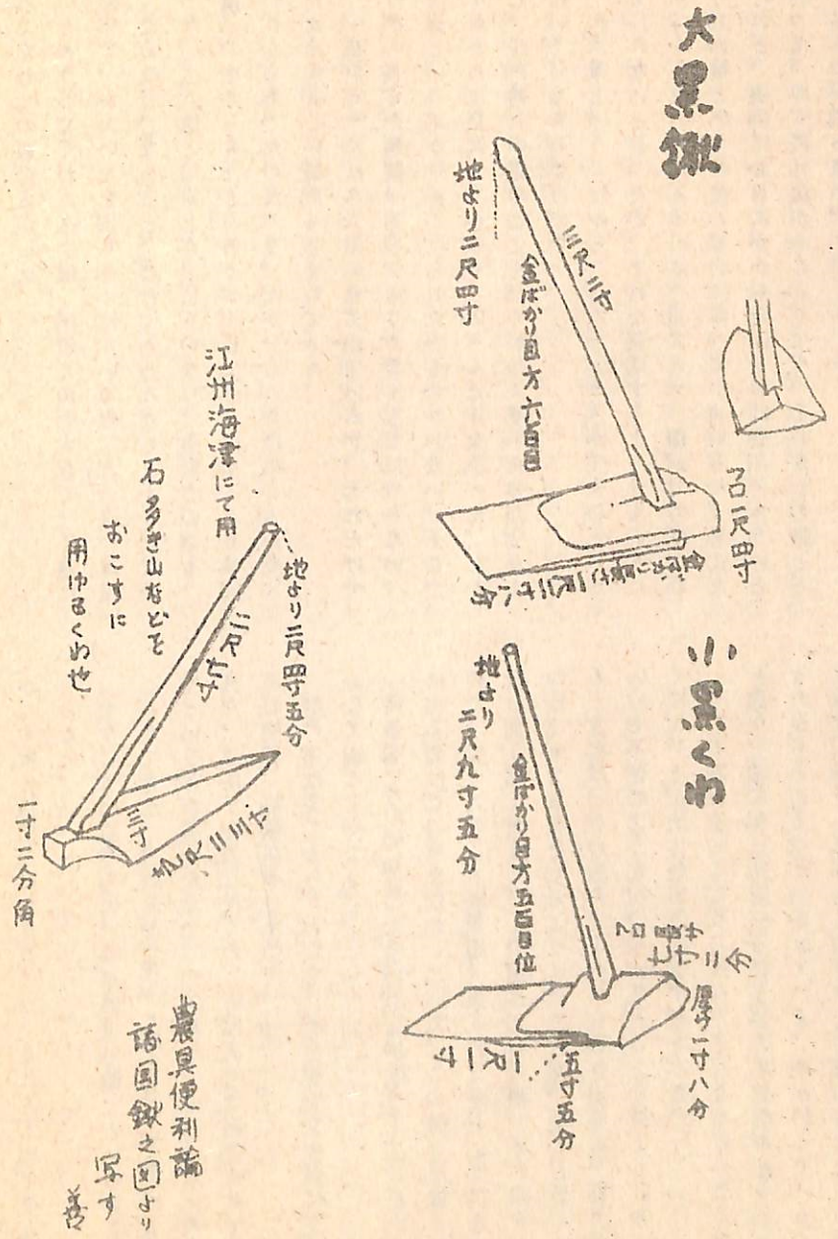
別の本には「畔鍬」という字を使ってあったが、これがこの鍬の性格と関係あるのか、それとも当て字なのか判らない。

そうしているうちに、「農具便利論」という本を見ることができた。文政年間(今から約百五十年前)に大蔵永常という人が書いた本で、四二種類、一一〇点に及ぶ農具が、寸法を記入したくわしい図入りで紹介されている。その中に、鳥鍬があったのだ。

図の方は見てもらうとして、その説明文を現代文になおして読んでみよう。

「尾張国(今の愛知県)知多郡から諸国へ土工の出かせぎに出る者はこの鍬を使用している。この鍬を黒鍬というので、働く人のことも黒鍬、黒くわと呼ぶようになった。藪を切り開く時など、この鍬だと竹の根、木の根を切るのにまるで豆腐を切るように無造作だ。池など新しく掘るときには、他の鍬の三丁分の仕事が出来る。目方が重いので不便のようだが、使いなれると小鍬より仕事がらくに出来る。土方仕事には必ず使うべきだ」

そこで図を見てもらうと黒鍬がどんなものかよく判ると思う。前に私は印旛沼干拓工事の黒鍬者の絵を出した。その足もとにも鍬が描かれている。柄が短くてバカでかい鍬だ。あまり大きいしつり合いが悪いので、この絵を見た人は、ヘタくそな絵だと思ったかもしれない。とこ



ろがこれが大黒鍬だったのだ。

つまり大黒鍬は、土を掘るより、掘った土をモッコにかき入れる役をしたのではないだろうか、というのが私の想像だ。でないと柄の長さと角度の説明がつかなくなる。長さはともかく、この角度(四八度)に柄がついた鍬では掘り起しにふさわしくないからだ。

「農具便利論」の「諸国鍬之図」をここに全部紹介できないが、大黒鍬の長さ一尺二寸巾八寸というのは別として、小黒鍬の一尺一寸、五寸五分というのは他の鍬とくらべて格別大きくはない。ではどこが違うのだろうか。

他の鍬には目方のことが書いてなくて、黒鍬にだけそれがあるのがヒントになるのだろう。おそらく刃の厚みが違ったはずである。畠には石がないから、刃が薄く軽い鍬の方が仕事がしやすい。しかし土木用の黒鍬は刃が厚く目方も重くなければ役に立たない。

まだまだ黒鍬については調べてみたいことがあるけれど、これまでに判ったことだけでも、江戸時代の土方の道具は黒鍬が中心で、どんなものかの見当はついてきた。

しかし、ここで不思議なことはツルハシのことである。

なるほど、木の根の多いところでは鍬の方が便利だが、石の多いところではツルハシの方が有利に決っている。ところが、これまで黒鍬のことを調べるためにいろいろ本を見てきたが、江戸時代のツルハシのことが出てこない。たとえば佐渡や生野などの鉱山の絵を見ても、ツルハシを使っているところを描いたものが見当らない。さがせば見つかるかもしれないけれど、私の見たかぎりではそういう絵に出てくるのは、金ヅチと石ノミなのだ。江戸時代の鉱山ではツルハシは使わなかったのだろうか。

もう一度「農具便利論」の「諸国鍬之図」にもどると、そこに「江州海津にて用う」鍬が出ている。「石多き山などを起すに用いる鍬なり」と説明がついている。

海津は今の滋賀県、琵琶湖の北岸にある昔からの交通の要所となった土地だ。観光案内をみると奇岩絶勝の地と書いてあったりするから、石の多い土地なのだろう。そこでこういう特殊な鍬が出来たのだろう。

しかし、これは鍬の変形であってもツルハシではないような気がする。ツルハシの先祖といった方が正解かもしれない。

諸国の鍬だけでも二十九種もくわしく紹介した大蔵永常が、ツルハシを知らなかったとは考えられない。知っていても農具ではないから紹介しなかったのか。それとも永常の時代にはまだツルハシはなかったのか。

今から百五十年前にはツルハシはなくて、海津の鍬のようなものが、その後、改良されてツルハシになったの

か。それとも明治になって鉄道工事などと一諸に外国から輸入された道具に日本風な名がつけられたのか。

そんなことが判ったって、判らなくったってどうでもいいことかもしれないが、一度疑問を感じると気になって仕方がないのだ。

何とかして知りたいと思っていると、ごく最近、岩波文庫で「百姓伝記」という本を手に入れた。江戸時代の土工のことを知るためには農業のことを知っておく必要があると思ったから、この本を買ってきたのだが、何とその中にツルハシのことが出ていたのだ。

「百姓伝記」の作者は判らない。書かれたのは天和二年(一六八二)ごろと推定されている。今から約三百年前で「農具便利論」より約百五十年も前なのだ。

そこにこう書かれている。原文は読みにくいから、これも現代文になおしてみよう。

「鶴のはし。ふだん田畑の仕事に使う道具ではない。けれども農家になくてはならぬ道具である。固い土、石地を掘るのに都合よい。オノやマサカリのように、長さが八、九寸から一尺(約二〇センチから三〇センチ)にこしらえる。地金(練鉄)の四方から湯金(鋳鉄)をつけてこしらえねば、固い土にうちこんだり、石に当ったときに、刃先が破損して役に立たない。四角に打ち、刃先を鶴のくちばしのようにして、四方に湯金をつけるので、鍛冶屋が下手ではつくれない。石畑、固土を持った農家は鶴のはしがなくては仕事にならない。また用水路や堤防工事などには必ず使われるものである。樫の木で柄をすげて使うとよろしい。山をくずしたり、石を掘り出したりするのに便利だ」

「百姓伝記」のおかげで、ツルハシが三百年以上も昔から使われていたことが判った。他にもこの本には、鍬のことや、治水工事についていろいろ書いてあるが、今は省略して別の機会にゆずろう。

昔の土方の道具は鍬であり、モッコであったが、ツルハシや鋤(粘土などを掘るとき)なども、その工事の内容によって使ったのであろう。ジョレンや、金テコも考えられる。そうして、これらの道具は現在でも勿論私たちの仕事場で使われているのだ。